慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | スミスのいわゆる「初期未開の社会状態」について |
| Sub Title | On Smith's "early and rude state of the society" |
| Author | 遊部, 久蔵 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1954 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.4 (1954. 4) ,p.366(36)- 400(70) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19540401-0036 |
| Abstract | |
| Notes | 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540401-0036 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌　第四十七卷　第四號



# スミスのいわゆる「初期未開の社會狀態」について

遊部久藏

一　スミスの本文
二　價値法則における歴史と論理
三　批判(一)――超越的
四　批判(二)――內在的

## 一

「A・スミスの諸矛盾は、それが諸問題をふくんでいるという點で、重要である。その諸問題を、たしかに彼は解決してはいないが、しかし彼自身が矛盾することによつて、それらを明示している。この點にかんする彼のただしい本能は、彼の後繼者たちがそれぞれたがいに對立して、あるときは一つの面を、またあるときはもう一つの面をとりあげているということによつて、もつともよく證明されているのである。」(註一)

いまここにとりあげられるスミスの矛盾は彼の價値論中にみられる矛盾である。しかもそのすべてではなくして、とくに價値法則の適應性にかんする彼の矛盾した見解である。『國富論』第一篇第五章において、彼自ら提起した價値論の第一の課題、「交換價値の眞實の尺度は何であるか、換言すれば、すべての商品の眞實價格は何に存するか」(註二)にこたえたのち、第六章の冒頭において、彼は――一見したところ――價値法則の現實の社會への適應性を否定する。そして價値法則の適應しうる段階はあたかも「初期未開の社會狀態」であるかの如くに措定される。ふるくしてしかもあたらしいと考えられる價値法則の適應性の問題がここにはじめて展開される。

曰く「資本の蓄積と土地の私有とに先立つ初期未開の社會狀態においては(in that early and rude state of society which precedes both the accumulation of stock and the appropriation of land)、種々の商品を得るために必要とせられる勞働量の間の割合は、これらの商品を相互に交換するための定規となりうる唯一の事情であつたと思われる。例えば、狩獵民族の間で一頭の海狸を殺すには二頭の鹿を殺すだけの勞働が通例必要であるとするならば、一頭の海狸は當然に二頭の鹿と交換されるであろう、あるいは二頭の鹿の値あるものとされるであろう。その生產に通例二日の、または、二時間の勞働を要する物は、その生產に通例一日のまたは一時間の勞働を要する物の二倍の値をもつことは當然である。……

かくの如き事態においては、勞働の全生產物は勞働者に屬する、そしてある商品の獲得または生產に普通に要する勞働の量は、通例その商品を以つて、購い、支配し、またはそれと交換せられる勞働の量を律しうる唯一の事情である。」(註三)

このようにして「初期未開の社會狀態」においては、價値法則が行われる。同時にまた勞働の生產物が全部生產者のものとなる、すちわち勞働の生產物は、――スミスの言葉をかりれば――「勞働の自然的報酬」＝「自然的賃銀」を

構成する。

しかしこのような狀態は資本（ストック）がひとたび特殊な人々の手に蓄積され、また土地の私有が行われるようになるとゆるされない。資本（ストック）の所有者は利潤を要求し、土地の所有者は地代を要求し、したがつて勞働の生產物あるいはその價格は賃銀のみならず、利潤及び地代にも分解する。しかるにスミスにおいては、價格の分解と價格の構成とが明確に區別されていないために、ここに商品の價格は賃銀、利潤及び地代によつて構成されるとの見解、のちの自然價格論の前提がすえられる。（周知の如く自然價格とは、それを構成する賃銀、利潤及び地代がいずれも自然率（＝普通率又は平均率）にあるような價格を稱する。）

「事態がかくなると、勞働の全生產物は必ずしも勞働者に屬するとはかぎらないことになる。多くの場合においては、彼は彼を傭うところの資本の所有者とこれを分割せなければならない。また、こうなれば、ある商品の獲得または生產に普通に要する勞働の量は、通例その商品を以て購い、支配し、またはそれと交換される物の量を律しうる唯一の事情ということもできない。賃銀を前拂し、その勞働の原料を供給したところの資本（ストック）の利潤にたいしてもまた、別に追加量が支拂われなければならないことはいうまでもない。」（註四）

元來スミスの考えでは、價値尺度のみを問題意識する立場から、支配勞働價値說はこれを終始一貫させ、したがつて投下勞働價値說は、これを投下勞働量＝支配勞働量であるかぎりにおいてのみ維持している。――もつとも必ずしもこういえない面もあり、むしろその面にこそスミスの偉大さがあるのだが、この點はのちにふれる。それに支配勞働價値說は投下勞働價値說を暗默のうちに前提している。蓋し價値の外在的尺度としての支配勞働量――げんみつに云えばこれもあやまりで、支配勞働生產物量というべきだ。――は、價値の內在的尺度としての投下勞働量を前提しているからである。（そもそも價値の外在的尺度は內在的尺度の外在化したものでしかない。）したがつて資本（ストック）の蓄積が行われ、利潤というあたらしい所得形態の成立によつて、投下勞働量＝支配勞働量でなくなれば、價値法則は維持されがたい。更に土地の所有によつて地代というあたらしい所得形態の成立ともなれば、一層そうなるであろう。

「ある國の土地がすべて私有財產となるやいなや、地主もまたすべての他の人々と同じく、彼等がかつて蒔かなかつた場所で收穫することを好み、その自然的な生產物にたいしてすら地代を要求する。――勞働者はいまや自然的な生產物を採取するための許可にたいして代償を拂わねばならない、そして彼の勞働が採取し、あるいは生產した物の一部分を地主に引渡さねばならない。この部分、もしくは、これと同じことではあるが、この部分の價格は、土地の地代を構成する、そしてそれは多くの商品の價格において、第三の構成部分をなすものである。」（註五）

かくしてスミスにおいては、奇妙な仕方で、價値構成說（生產費說）が支配勞働價値說と結合されることとなる。

「價格の各種の構成部分の眞實價値は、それらの構成部分が、その各々が、購買しまたは支配しうる勞働の量で尺度されるものであることは、ここに注意しておかねばならぬ。すなわち、勞働は勞働（「正しくは賃銀とすべきである。スミスにおける勞働と賃銀との混同の重要いぎについては後論。――遊部註、以下Aと略記す。」）に分解するところの價格部分の價値を尺度するばかりではなく、地代に分解する價格部分、利潤に分解する價格部分の價値をも尺度するのである。」（註六）

なお第八章賃銀論の冒頭においても勞働の生產物からの利潤と地代との控除がのべられている。

このようにみてくると、スミスは價値法則の妥當しうる段階として「初期未開の社會狀態」を措定したかのように見える。したがつて現實の資本主義社會においては價値法則は放逐され、これに代わつて自然價格の法則が作用して

いるとのべられているかのように見える。マルクスのつぎの文章も一見かくの如き解釋をゆるすかのようである。

「アダムはもちろん、商品の價値をそれにふくまれている勞働時間によつて規定するが、そのあとではふたたび、この價値規定の現實性をアダム以前の時代へと、おしもどしている。いいかえれば、單純な商品の立場からみて彼に眞實だと思われるものが、單純な商品のかわりに、資本、賃勞働、地代等々の、より高度でより複雜な諸形態があらわれてくるやいなや、彼にははつきりしなくなるのである。このことを、彼はこう表現する。すなわち、人間がまだ資本家、賃勞働者、土地所有者、借地農業者、高利貸等々としてではなく、ただ單純な商品生産者と商品交換者としてだけあい對しあつていたにすぎなかつたブルジョアたちのうしなわれた樂園（paradise lost）では、諸商品の價値は、それにふくまれている勞働時間によつてはかられていた、と。」（註七）

しかし、このような解釋はスミス自身にそくした場合ただしいであろうか？　また右のマルクスの典據の眞意はどうであろうか？　これらの點を次節以下においてみるとしよう。

（註一）K. Marx; Theorien über den Mehrwert. herausgegeben von K. Kautsky. Bd. I. 1923, S. 171. 長洲一二氏譯、國民文庫、一八六頁。以下 Theorien と略稱。

（註二）A. Smith; An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations. edited by E. Cannan. Vol. I. p. 30. 大内兵衛氏譯、第一分冊、六五—六頁。以下 Wealth と略稱。

（註三）ib. pp. 49-50. 譯、第一分冊、一〇〇—一頁。

（註四）ib. p. 51. 譯、第一分冊、一〇三—四頁。

（註五）ib. p. 51. 譯、第一分冊、一〇四頁。

（註六）ib. p. 52. 譯、第一分冊、一〇五頁。なお、この句については、Theorien, Bd. II. Tl. 2. S. 129. 猪俣津南雄氏譯、一二七頁、ib. Bd. III. SS. 18-9. 林要氏等譯、三五頁參照。

（註七）K. Marx; Zur Kritik der politischen Ökonomie. Volksausgaabe besorgt vom M-E-L-Institut. 1934. S. 47. 國民文庫譯、六一頁。以下 Kritik と略稱。

## 二

スターリンがその著『ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題』のなかで確認しているように「價値法則は、なによりもまず、商品生産の法則である。」（註八）

しかるに商品生産は一個の經濟制度（クラード）である。だからさまざまの社會經濟的構成に存在している。それの最初期の形態は原始共産體のうちにもみられた。商品交換ははじめ共産體と共産體との間にみられた。共産體の剩餘生産物がまず交換の對象とされた。というのは私的所有のみとめられぬ共産體の内部には交換もまたみとめがたいからである。（商品交換は交換の對象の私的所有を前提する。）しかるに次第に外部的交換は共産體内部にも反射的に行われてくるにつれて、ひいては共産體の崩壞をもたらしたとみられている。じらい、商品生産は古代社會、封建社會を通じて次第に發達した。そして、「商品と商品生産とがあるところには、價値法則もないわけにはゆかないのである。」（註九）いわば投下勞働量によつて規定された價値の大きさを基準とする交換が行われる。

價値法則の適應性について經濟學史上、もつとも徹底した見解を表示したものは、ロバート・トレンズである。トレンズは、——その著『富の生産に關する一論』（一八二一年）において——社會發達の三段階すなわち（一）商品生産の

最初期、㈡社會的分業の確立期、㈢勞働者及び資本家への階級分化以後の三段階を劃して、價値法則の作用したのは第二の段階であるという。すなわち第一の段階においては、たしかに改良と人口の增進との結果、分業と私有財産の取得とが不可避的に行われ、これにもとずいて生産物の交換が行われる。しかし分業の恒久的確立に先立つ、「かかる未開且つ原始の狀態においては、交換價値を規制ないし規定する一定の基準は存しないであろう、ときおり生じた物々交換の條件は、それぞれひきつづいておきる場合において、契約當事者の目前の缺乏と欲望とによつて規制されるであろう。」（註一〇）

しかるに第二の段階においては事態はいちじるしく變化する。

「交換の頻繁なことが恒久的な分業を結果しはじめるや否や、事態は相異つたであろう。」（註一一）かかる社會狀態においては、各人は特殊な職業に從事し、彼の勞働の剩餘生産物とひきかえに他人の勞働の生産物の一部分を獲得しうるにちがいない。もしも二人の野蠻人の獵師が分業のないために自ら弓矢をも用意するとすれば、一日に一匹の鹿しか捕殺しえないが、甲が弓矢を用意し乙が狩場へ行くとすれば、彼等は一日に三匹の鹿を捕殺しうる。しからば、甲は一日の仕事と交換に全一匹以下の鹿をうけとるのを肯じないであろう。蓋し、もしもこのような不平等な條件を乙がおしつけるならば、甲はむしろ分業を解消して自ら獵を行つた方が有利であろうから。いな、この場合、甲は一匹半の鹿を一日の勞働と引換えに取得するであろう。分業が雙方に相等しい利益をさずけるまで乙は甲の要求に讓歩するであろう。……

かくして我々はみる、人々が特殊な職業に專念するやいなや、分業から結果する利益に參與する競爭が、彼等のそれぞれの諸商品の交換價値を決定するということを。共同體が資本家階級と勞働者階級とに分かれる以前には、かかる競爭は支出された全勞働量にもつぼら依存する、で、一つの職業における一日の勞働の生産物は他の職業における一日の勞働の生産物と交換されるであろう。」（註一二）

かくの如き交換の基準となる勞働は――トレンズによれば――直接勞働のみならず、資本に體現されている蓄積勞働をも包含する。「共同體の資本家階級と勞働者階級とへの分裂に先立ち、一産業部門を擔當する個人が彼自身の勞働を遂行する初期の社會においては、生産に支出された蓄積勞働及び直接勞働の總量が、比較と競爭とを左右するところのものであり、また交易あるいは販賣取引において、一定量の他の商品とひきかえに受取られるべき一商品の數量を窮極的に決定するところのものである。」（註一三）

トレンズはかように價値法則の適應性を資本主義社會以前の商品生産、しかも社會的分業の確立以後の商品生産に制限したのであつて、それはそれ自體としてはただしい見解である。商品生産の最初期においては、勞働生産物の交換比例は全く偶然的であつた。トレンズのいわゆる「契約當事者の目前の缺乏と欲望」によつてそれは規制されざるをえなかつた。だが、かれこれするうちに、勞働生産力の增大はしだいに社會的分業を確立させていき、社會における勞働生産物のうちはじめから交換の目的で生産されるものの比率が增大していく。使用價値に分裂が生じ、社會的使用價値の誕生となる。すなわち他人のための使用價値を目的としての生産が行われる。勞働生産物における使用價値と交換價値との分離が行われていくにつれて、交換比例の生産そのものへの依存が、かくして價値法則の貫徹が實現していく。價値形態の發展の上からみれば、第二形態（「全體的な・または開展された・價値形態」）においてはじめて、「二人の個人的な商品所有者の偶然的な關係はみられなくなる。交換が商品の價値の大きさを調整するのでなく、その逆に、商品の價値の大きさが商品の交換比率を調整するのだということが、明かになる。」（註一四）

じらい、價値法則は資本主義生産様式成立以前まで商品交換比率を規定するものとして作用してきた。いな資本主義社會においても、さらに社會主義社會においても商品生産の行われている範圍内で價値法則は作用してきた。（資本主義社會におけると社會主義社會におけるとでは價値法則の作用のしかたが相異るが……）

エンゲルスがその『價値法則と利潤率』において彼の少年時代の見聞をもまじえて一九世紀ドイツにおいて農民や手工業者間に行われた商品交換が價値法則にもとずいて行われたことをしるしていることは周知の如くである。ここにはエンゲルスの結論のみを引用しておこう。――

「さて、勞働時間によるこうした價値規定から出發して全商品生産が發展し、それとともに、そこでは『資本論』第一部第一篇でのべられているような價値法則の種々の側面が自己を主張する多様な諸關係が發展し、したがつて殊に、そのもとでのみ勞働が價値形成的であるような諸條件が發展した。……

一言でいえば、マルクスの價値法則は、いやしくも經濟學的法則が妥當するかぎり、單純な商品生産の全期間にわたり、つまり單純商品生産が資本制的生産形態の登場によつて變更をこうむる時まで、一般的に妥當する。その時にいたるまで、價格は、マルクスの法則によつて規定される價値の方へひきつけられ、この價値をめぐつて動搖するのであり、したがつて、單純な商品生産が充分に發展すればするほど、それだけますます、外的な暴力的攪亂によつて中斷されない比較的長期間の平均價格が、等閑に付すべき限界内で價値と一致する。だからマルクスの價値法則は、生産物を商品に轉化する交換の端初から紀元一五世紀までの期間にわたり、經濟學的・一般的な妥當性を有する。しかるに、商品交換は、いつさいの書かれた歴史以前に横たわる時代――エジプトでは少くとも紀元前二千五百年おそらく五千年にさかのぼり、バビロニアでは紀元前四千年おそらく六千年にさかのぼる時代――からのものである。だから價値法則は五千年ないし六千年の期間にわたつて支配的に行われてきた。」（註一五）

エンゲルスがその論文中で「決定的な章句」として引用する『資本論』第三卷中の一文には次の如くしるされている。

「その價値またはほぼその價値での諸商品の交換は、生産價格での交換――そのためには一定高度の資本制的發展が必要である。――の場合よりもはるかに低い段階を要求する。……

だから、價値法則による價格及び價格運動の支配は別として、商品の價値を理論的にのみならず歴史的にも生産價格の先行者とみなすことは、まつたく事態適應的（ザッハゲマース）である。このことは、生産手段が勞働者に屬するような狀態に妥當するのであつて、こうした狀態は、古代世界でも近代世界でも、みずから勞働する土地所有農民の場合、および手工業者の場合にみられる。……それは、……原始的狀態に妥當するのと同様に、奴隷制および農奴制にもとずく後代の狀態にも、また手工業者の同職組合組織にも……妥當する。」（註一六）

だが封建的生産様式が資本主義的生産様式によつて打倒され、後者の支配がすすめばすすむほど、價値法則の作用は小商品生産の範圍内にせまくかぎられていき、これにとつてかわつて「平均利潤率の法則」が支配的に作用するようになる。もちろん封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行過程において價値法則はきわめて重要な役割を演じた。すなわち社會的必要勞働時間による價値規定は一方では社會的價値以上の個別的價値で商品を生産する零細な生産者たちを沒落させていき、他方では社會的價値以下の個別的價値で商品を生産するものをして特別剩餘價値を取得せしめ、かくして資本の蓄積を促進した。（註一七）しかし、これによつて資本主義生産様式が國民經濟的規模において支配的となればなるほど、各生産部門間における資本の競爭を媒介とする利潤率の均等化による生産價格の成

立、換言すれば價値の生產價格への轉化がもたらされざるをえない。そのようないみで價値は生產價格の歷史的先行者である。そもそも社會的價値（市場價値）の成立をもたらす同一生產部門內部における競爭は生產價格の成立をもたらす相異る生產部門間の競爭にたいして歷史的に先行している。

けれどもさきのマルクスの文章にもみられるように、價値は生產價格の論理的先行者でもある。いまこの點について詳論しえないが、たとえば生產價格を構成する費用價格と平均利潤とのいずれをとつてみても、それらはともに價値法則を前提しなければ理解しえない。また生產價格の運動のみならず、國民經濟全體の運動の初發の大前提――經濟的諸要因の數量的運動の全範圍を決定するといういみで――たるべき社會的總價値が價値法則によつて決定されることはいうまでもない。（もつとも、生產價格と價値との中間には無數の媒介項が存在している。こころみに『資本論』において兩者の取扱われている位置を想起せよ。）

要するに生產價格は價値の轉化形態であり、したがつて逆に生產價格から價値は抽象されうる。マルクスのみがこの抽象に成功した。古典經濟學最良の代表者の一人、リカードオはこの抽象に成功しなかつた。いなむしろ價値と生產價格との關聯についての問題意識がもともと存しなかつた。リカードオの『經濟原論』第一章「價値について」における混亂せる敍述をみよ。さきに引用したトレンズ、價値法則が商品生產のみに適應しうることを明確に指摘したトレンズはどうであろうか。彼はリカードオにおける價値と生產價格との混同にたいして、この區別を明確にした。すなわち彼は價値法則を商品生產の法則として措定し、彼のいわゆる「競爭の法則」――それは利潤率均等化の現象形態の極めて拙劣な素描でしかない。――を資本制生產の法則として措定した。歷史的事實のありのままの承認としては、それはただしい。しかしかかる機械的區別によつて、價値と生產價格との內面的聯關――歷史上及び論理上の――が否定される點においてそれはあやまつていると云わねばならない。いわば價値と生產價格との區別と同一性との統一という辯證法的統一關係において、リカードオはそのうちの同一性、トレンズは區別の契機にしがみつく。

「リカードオは、資本と賃勞働との分離が――多少の例外はあるが――商品の價値規定になんらの變化をおよぼさないことを說明しようとした。トレンズは、リカードオの例外に立脚して、彼の法則を否定する。彼は（リカードオの論證と背中合せになつているところの）アダム・スミスに還る、アダム・スミスは、なるほど『社會の初期』においては、すなわち人々が依然としてただ商品所有者及び商品交換者として對立している時には、商品の價値はそのなかにふくまれた勞働量によつて決定される、けれども資本と土地所有とが形成されて以後はそうでない、と答えている。これは……商品としての商品に妥當する法則は、商品が資本として、あるいは資本の生產物として考察さるるにいたるやいなや、つまり商品から資本にすすむやいなや、もはや妥當しないということである。他方生產物は、資本家的生產の發展にともない、またその基礎の上において、はじめて全面的に商品の姿容をとる、――全生產物が交換價値に轉化されねばならぬことによつても、またその生產の構成分子自體が商品としてそのなかに入りこむことによつても、――それは初めて全面的に商品となる。だから商品の法則は商品をすこしも生產しない（あるいは部分的にのみ生產する）ような生產のなかに存在すべきであつて、それの基礎が商品としての生產物の定有であるような生產の基礎の上では存在すべきでない。この法則自體が、生產物の一般的形態としての商品と同じように、資本家的生產から抽象される、しかもそれはまさにかかる生產には妥當せぬ筈である。」（註一八）

しからば價値の生產價格にたいする先行性における歷史的側面と論理的側面との統一はいかなる點にあるのであろうか？　それは現實の資本主義生產樣式の生產物の支配的で規定的な性格が商品であるという點にある。このこと

は、生産の直接的目的及び規定的動機が剰餘價値の生産であるということとともに、この生産様式を諸他のそれから決定的に區別する點である（註一九）。しかし資本主義生産様式の生産物は、賃勞働を前提とするといういみにおいて、それは㈠商品としての生産物という性格と㈡資本の生産物としての商品という性格とをあわせ有している。マルクスは、したがつて、『資本論』劈頭においては、資本主義生産様式の生産物の有するみぎの二つの性格から第一の性格のみを抽象して（逆にいえば第二の性格は捨象して）、これを分析したといいうる。かくして價値法則が定立された。だがただの商品としての生産物という性格は、資本主義生産様式の生産物にのみかぎられるものではなくして、それに先行する單純商品生産の生産物一般に共通するところのものである。したがつてここに資本制商品の分析によつて定立された價値法則の單純な商品生産への適應性がみられる。かくしてまた單純な商品の分析から資本制商品の研究へとすすむということ、價値から生産價格へとすすむということにおける歴史と論理との照應及び統一がみられる。

もちろんこの場合、價値法則の定立が純粋に理論的操作によつてえられるものでないことは注意を要する。經濟學の研究においてあれほど「抽象力」のいぎを強調したマルクスではあるが、商品から分析を開始するということの正しさ及び價値の諸規定の檢出にかんして歴史的研究がゆたかにそれを裏付けているものと思われる。

しかし、ここにこういう反問が生じるであろう。價値法則が商品生産の法則であるならば、それはなにゆえに古代乃至中世の理論家たちによつて定立されなかつたのであるか？　すなわちイギリスにおいてはほぼウィリアム・ペティの當時よりその把捉が可能となつたのであるか？　という問題、これである。一言にして答えれば、資本主義社會において前述の如く商品形態が勞働生産物の支配的で規定的な性格となることによつて社會的總勞働の社會的諸欲望に應じる配分がもつぱら商品の交換を通して實現するといういみで、價値法則が全國民經濟における「生産の規制者」（スターリン）となり（註二〇）、かくして價値法則の抽象が可能となるからである。また價値規定の諸局面が實際的に成熟することによつて、それらの檢出が可能となるからである（註二一）。けれども、このことは、なんら價値法則の商品生産に特有の法則たること自體を否定するものではない。この點、價値法則の存在過程と認識過程との明確な區別が必要とされる所以である。

（註八）スターリン著、飯田貫一氏譯『ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題』國民文庫、四七頁。
（註九）同、二六頁。
（註一〇）R. Torrens; An Essay on the Production of Wealth. 1821. p. 19.
（註一一）ib. p. 19.
（註一二）ib. pp. 20-1.
（註一三）ib. pp. 33-4.
（註一四）K. Marx; Das Kapital. Volksausgabe besorgt vom M-E-L-Institut. Bd. I. 1932. S. 69. 長谷部文雄氏譯、青木文庫、第一分冊、一五八頁。以下 Kapital と略稱。
（註一五）F. Engels; Ergänzung und Nachtrag zum dritten Buch des, Kapital". Die Neue Zeit. XIV. Jahrgang, Bd. I. 1895. SS. 38-9.『資本論』青木文庫、第八分冊、五五―六頁。
（註一六）Kapital. Bd. III. SS. 202-3. 譯、第九分冊、二六六頁。
（註一七）スミスは一般的・通常的勞働時間を以て價値の尺度としている。すなわち、ある商品の生産に通例（usually）あるいは普通に（commonly）必要とされる勞働量が、この商品によつて購買され支配される勞働量を規制しうることをみとめている。本文三七頁六行目以下及び三八頁八行目以下に引用の兩文章をみよ。また、彼は、「製造業上の祕密」が長くたもたれるとき、

「特別利得」(extraordinary gains)＝「特別利潤」(extraordinary profits) がもたらされるとのべるとき、それは特別剩餘價値の生産を指示しているのであるが、彼はこれを商品の市場價格の自然價格以上への吊りあげの一事例として、獨占（自然的及び人爲的）による特別利潤と明確に區別していない。(Wealth. Vol. I. pp. 62-4. 譯、第一分冊、一二二—六頁)。

(註一八) Theorien. Bd. III. S. 80. 林要氏等譯、九三—四頁。

(註一九) Kapital. Bd. III. SS. 936-7. 譯、第一三分冊、一二三八—四〇頁。

(註二〇) 「商品としての生産物という、または資本制的に生産された商品としての商品という、……二つの性格からして、全價値規定が、また價値による總生産の規制が、生ずる。」(ib. S. 936. 譯、一二三九頁。)「價値法則が生産の規制者となりうるのは、資本主義のもとだけであり、生産諸手段の私的所有があり、競爭、生産の無政府性、過剩生産恐慌があるばあいだけである」(スターリン著『ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題』、三二頁。)

(註二一) 拙著『價値論爭史』(昭和二四年) はこの點の解明にくわしいが、價値法則の存在過程と認識過程との明確な區別を缺き價値法則を以て資本のロゴスとみなしている點においてあやまちをおかしている。

## 三

再び第一節でのべたスミスの見解にもどるとしよう。

スミスが價値法則の適應性についてあたかもトレンズと同じく商品生産と資本制生産とを區別して前者にのみこれをみとめているかのようであることは、スミスの本文にみられたところである。後世の經濟學者たちのスミス解釋は大多數このようにみている(註二二)。また、マルクスの解釋も一見このような解釋に類するかのようである。しかし『經濟學批判』序說冒頭における次のような章句は、マルクスの鋭利な洞察を示しており、俗見をしりぞけるのに充分である。

曰く「スミスやリカードオが出發點とする個々の孤立した獵師や漁夫は、十八世紀の、幻覺をともなわない想像物に屬する。それはロビンスン物語ではあるが、けつして文化史家の考えるように、たんに過度の洗練醇化にたいする反動や、誤解された自然生活への復歸を表現するものではない。それがこのような自然主義にもとずくものでないことは、うまれながらに獨立している諸主體を契約によつて關係させ結合させるルソーの社會契約がそうでないのと同樣である。このような自然主義は、大小のロビンスン物語の假幻であり、しかも、ただその審美的假幻であるにすぎない。それはむしろ、十六世紀以來準備されて十八世紀にその成熟への亘歩をすすめた『市民社會』(ブルジョア)を見こしているものなのである。この自由競爭の社會では、個々人は、それ以前の諸歷史時代に彼を一定のかぎられた人間集團の一員にしていた自然の紐帶その他から解放されてあらわれる。スミスやリカードオがまだまつたくその影響下にあつた十八世紀の豫言者たちは、十八世紀のこうした個人——一方では封建的社會形態の解體の產物であり、他方では十六世紀以來あらたに發展した生産諸力の產物である——を、過去に實在した理想として思いうかべていたのである。歷史の結果としてではなく、歷史の出發點として。なぜなら、このような個人は、自然にしたがうものとして、人間性についての彼らの表象にふさわしく歷史的に成立したものではなく、自然によつて措定されたものと思われたからである。こういう錯覺は、これまで、いつの新しい時代にもつきものであつた。」(註二三)

元來、スミスによる經濟法則の研究は自然法的思想を背景とするものであり、したがつて商品交換の研究においてもこのような立場からなされている。『國富論』第一篇第四章のさいごの部分で、彼は以後の諸章ではたされる研究の課題を掲げるにさいして曰く「種々の貨物を貨幣または他の貨物と交換するに當つて、人々が自然に遵守するとこ

ろの法則（the rules which men naturally observe）はいかなるものであるか、私はすすんでこれを研究しようと思う。これらの法則は貨物の相對的價値または交換價値とよばれるものを決定する。」（註二四）このような自然法則の探究――いわば交換過程における自然的秩序の實現がスミス價値論の課題であつた。（註二五）

しかるにスミスは單一ではなく二つの自然法則を發見した。すなわち一つは價値法則であり、一つは自然價格の法則であり、そのいずれも自然的秩序をあらわすものである。しからばこの二つの法則はいかなる關係にあるものとしてスミスによつて把握されたのであろうか？　スミスにとつては價値法則は第一次の自然であり、自然價格の法則は第二次の自然であつた。自然的秩序の上で前者は後者の基礎ないし媒介とされた。これがすなわち『國富論』第一篇の第五章においてまず價値法則が展開され、ついで第六章乃至第七章（あるいは廣義においては第一一章）において自然價格の法則が展開された所以である。そしてかように價値法則と自然價格の法則とを自然的秩序の上で位置ずけしめる條件となるものがほかならぬ、資本（ストック）の蓄積と土地の私有との有無ということであつた。したがつてこの二つの秩序は時間的、繼起的關係というよりは、むしろ同時存在的關係をもつているのである。ただ前者は後者に比して自然的秩序の上でより低い次元に位するものとみなされたのではなかろうか？　このような解釋をゆるすかのように思われるのは、かかる二つの秩序がスミス生存當時、相並んで實存していたことである。その基礎はいうまでもなく、國民經濟全體の上で、商品生産が資本主義生産との對比上、あなどりがたい比重――マルクスはもちろんリカードオの時代にくらべてすらいちじるしくより大きな比重――を占めていたということである。この點において想起されねばならぬのは、スミスが「マニュファクチュア時代の包括的經濟學者」（註二六）であつたということである。彼が、「ヨーロッパのいかなる部分においても、獨立の職工（ワークマン）一人にたいして雇主のもとに働く職工（ワークマン）二〇人の割合である。」（註二七）とのべるとき、この雇主のもとに働く二〇人のうちにはマニュファクチュア的勞働者だけではなく問屋制支配のもとに從屬している非獨立の生産者たちもふくめられているとみなければならない。（註二八）

このためスミスにおいては、商品生産と資本主義生産との關係が移行の關係として明確に把握されず、この二つの制度はともに自然的なる同時存在的秩序として、ただ次元の高低を異にするものとしてのみ把握され、かくして前述の如く價値法則と自然價格の法則との關係もこのようなものとして把握されたのである。ここに經濟的世界を觀察するスミスの視點における二重性――小商品生産者的視點と資本家的視點と――が看取されるのであるが、もちろんスミスの偉大さは彼が開明にもより前進的な後者の視點によりすぐれて立脚して、いわば「時代に先がけて」當時の經濟問題を分析した點にある（註二九）。

スミスの自然法思想が舊い形態でのそれではなく經驗的自然法の立場であるということのいみは、この點にもうかがえるのであつて（註三〇）、それはまた彼の理論の實踐的性格とも直結している。價値法則も自然價格の法則もともに「流通の正義」の實現として把握されることによつて、かくの如き自然的秩序にたいする侵犯としての一切の人爲的秩序、なかんずく特權的＝及び獨占的商人資本の利益を代辯する重商主義的な經濟政策へ批判の矛先がむけられたと云える。

だが商品生産から資本主義生産への移行と兩者の決定的區別とがスミスにおいては不明確であるから、ここに彼の論理はすくなからず混濁せざるをえない。彼のいわゆる「市民社會」（civil society）あるいは「文明社會」（civilized society）はけつして資本主義社會の内容上相卽するものではない。それらは資本（ストック）の蓄積と土地の私有との存在を前提とするものである。資本（ストック）の蓄積という。スミスにおける資本概念が不明瞭なものをのこしていることはここにのべる

までもないが、資本の所有者（より適切に云えば、「資本の蓄積」者〔集積者〕であり、これは單なる用語上の差異ではなく、重要なるいみを有すると考えられる。）はげんみつないみでの資本家ではない。それには多分に「前期的」なものがふくまれているとともに、かなりひろい擴張解釋をもゆるす概念である。土地の所有者という。スミスにおける土地所有者中には單に近代的地主だけではなく、封建領主をもふくむ。がそもそもこのような資本家及び地主の概念の未成熟さは勞働者の概念の未成熟さと關聯對應するものである。スミスのいわゆる勞働者は近代的賃勞働者のみではない。それには獨立の農民や職工によつて代表される直接的生産者がふくめられている。されば、「資本（ストック）の蓄積と土地の私有」は、マルクスのいわゆる「本源的蓄積」と同一いみを有するものではない。

かくして、スミスは、「商品生産の所有法則の資本制的取得法則への轉變」（『資本論』第一卷第二二章第一節）をみおとした。ここにスミスの所得範疇の曖昧さがあらわれてくる。それは右にのべた近代社會の三大階級、資本家、地主、勞働者の概念の未成熟に由來するものであつて、利潤といい、地代といい、賃銀というも、資本主義的所得の形態――リカードオにみられる如き――をそのままあらわすものではない。ここではとくに剰餘價値の轉化形態としての利潤及び地代と賃銀との關係について云えば、前者は後者にたいして自立し對立する所得形態としてではなく、後者の食いこみ――蠶食として把握されていると云わねばならない。このことは第一節において引用したスミスの本文にもあきらかであるが（註三二）、本來ならば勞働の自然的報酬であるべきはずの全生産物からの控除として利潤及び地代が考えられているのであつて、したがつて、本源的には利潤及び地代は賃銀の一部分であり、この點において支拂われたる賃銀（部分）と共通の所得源泉に由來するとみなされている（註三三）。しかし現實の資本主義生産過程においては、勞働者の全生産物は直接生産者たる勞働者の所有には屬さず、資本家の所有に屬する。賃銀は全生産物價値の分割部分をあらわすものではなくして（註三三）、本質的には勞働力の價値の轉化形態であり、このいみで剰餘價値の轉化形態たる利潤及び地代とは相互に獨立した所得形態である。これらの點はスミスの理解のおよばぬ點である。それゆえ、商品生産と資本主義生産との區別點は、所得の面にかんするかぎり、極言すれば、單なる量的區別として、すなわち賃銀の壓し下げとしてのみ考えられているのである（註三四）。

スミスの論理の混濁はここに由來している。本來ならば商品生産と資本主義生産との區別として把握されるべきものが『初期未開の社會狀態』と『市民社會』との區別としてスミス流に把握されたために、商品生産と資本主義生産とがしばしば實際上（praktisch）また事實上（in der Tat）混同されている。「商品生産を資本主義的生産と同一視してはならない。これらは二つのちがつた事柄である。資本主義的生産は商品生産の最高の形態である。商品生産が資本主義にみちびくのは、つぎの場合だけである。すなわち、生産諸手段の私的所有が存在している場合、勞働力が商品として市場にあらわれ、それを資本家が買つて生産過程で搾取することができる場合、したがつて國内に資本家による賃銀勞働者の搾取の制度が存在する場合である。資本主義的生産は、生産諸手段が私人の手に集中され、そして生産諸手段をうばわれた勞働者たちが自分の勞働力を商品として賣りわたすことをよぎなくされているところで、はじまるのである。これがなければ、資本主義的生産はない」。（註三五）

スミスによつて、「初期未開の社會狀態」及び「市民社會」とよばれたもののあるべき實體が、商品生産の行われている社會及び資本主義社會に該當するにもかかわらず、このようなものとしての認識に失敗しているために、したがつて價値法則が商品生産の法則、自然價格の法則が資本主義生産の法則として把握されるにいたらなかつた。この點に本來ならば「初期未開の社會狀態」を對象とすべき『國富論』第一篇第五章の敍述中に一見資本主義的生産諸關係――

例えば「勞働者」「勞働の賃銀」等――の混入が見出されるかのごとくに考えられる所以である（註三六）。

しかし、ここになお問題がのこる。スミスがもし、前述の如く價値法則を第一次の自然、自然價格の法則を第二次の自然としてしかも兩者を二つの同時並存的秩序としてとらえたのであるならば、なぜ價値法則の行われる社會を稱して「初期未開の社會狀態」とよんだのであるか、という問題、これである。從來のスミス解釋中、段階說を主張する論者のすべてはこのような表現樣式を根據としているのである。しかしこの問題の解決は容易である。スミスが自然法思想家であるとともにまた啓蒙主義者であつたことを想起する必要がある。彼はここで啓蒙主義者にふさわしくあるべき自然の秩序の展開を過去より現在にいたる歷史的展開として假想したまでである。（ルソーをみよ。）本節冒頭に引用したマルクスのスミス解釋の一文はこのようなスミスの啓蒙主義者的手法を指示したものである。したがつて、スミスのいわゆる「初期未開の社會狀態」は文字通り初期未開の社會狀態を示すものではなく、むしろ市民社會においてあるべき人間關係の一面を示すものでしかない。されば價値法則にしたがつて交換する獵師と漁夫とは、當時めざましく上向的發展過程をたどりつつあつた、市民社會におけるあらたな生產力の擔い手としての獨立小生產者たちにほかならない（註三七）。

このような事例を『國富論』中にもとめれば、例えば第三篇「諸國における富裕の進步の差異について」においてスミスは周知の如く一種の經濟發展段階說、すなわち農業――工業――商業という發展段階說をのべている。それはスミス自身のべる如く「富裕の自然的進步」（natural progress of opulence）を示すものであり、「事物自然の成行き」（natural course of things）を示すものである。それは人類經濟史の具體的研究によつてえられたというよりは、スミスによつてあるべき自然の秩序と考えられたものを、これをゆがめてきた人爲の秩序との對照において展開したものであり、しかも歷史的過去に重點があつたのではなく、むしろ當時のイギリス國內市場の形成をさまたげる重商主義の經濟政策をそれによつて批判するという極度に實踐的目標を有するものである。だから、そこに農業といわれているものもあらたな生產力の擔い手である獨立自營農民による農業が含意されていることは云うまでもない（註三八）。

要するに、本來的マニュファクチュア時代の經濟學者であり自然法學者であるスミスのみた當時のイギリス社會には二つの自然の秩序、商品生產と資本主義生產、そして二つの法則、價値法則と生產價格の法則、が存在していたのである。しかもそれらはスミスによつていわば、第一次の自然及びその法則、第二次の自然及びその法則として把握されその間の關係は一見歷史的發展段階にあるかのように敍述されているが、その實、同一平面において同時並存的に把握されているにすぎない。すなわち商品生產の領域は「初期未開の社會狀態」、資本主義生產の領域は「市民社會」または「文明社會」として、ともに「商業社會」（commercial society）――各人が交換によつて生活し、ある程度商人となつているような社會――のうちにあつて、ただ資本（ストック）の蓄積と土地の私有との存否によつて區別されているにすぎない。

かくしてスミスにおいては商品生產から資本主義生產への移行、價値の生產價格への轉化における歷史的側面がみおとされるとともに、また論理的側面もみおとされてしまつた。すなわちスミスにおける「初期未開の社會狀態」は「市民社會」からの、價値は自然價格からの論理的抽象としてえられたものでもなければ、逆にそれぞれ、後者が前者からの論理的發展としてえられたものでもない。マルクスのいわゆる上向法の如きはみられるべくもない（註三九）。スミスをしてこれを不可能ならしめたもの、抽象の缺如の理由は、もとよりイギリス經驗論という精神史的背景も考えられねばならぬであろうが、なによりも抽象されるべきもの、商品生產と價値法則との廣汎な實存が、抽象そのものを困難ならしめていることが考慮されねばならぬであろう。このような觀點からマルクスによつて指摘されたスミス

の方法における二面性――大乘的（エクスタリッシュ）なスミスと小乘的（エクスタリッシュ）なスミス――が理解されうるであろう。

「スミス自身は非常な素朴さをもつて絶えざる矛盾のうちに動いている。一方では、スミスは經濟上の諸範疇の內的聯關を――あるいは、ブルジョア經濟體系のかくれた構造を追求する。他方では、彼は、その傍に、競爭という現象のうちに表面的に與えられているような、したがつて、ブルジョア的生產の過程のうちに實際的に囚われており利害をもつているものにとつてとまつたく同樣に、非科學的な觀察者にとつてあらわれるような聯關を併置する。この二つの把握の仕方は――そのうちのひとつはブルジョア的體系の內的聯關のうちに、いわばその生理學のうちに突入するものであり、他のひとつは生活過程において外面的にあらわれることを、その顯現し現象するがままに、ただ記述し、分類し、物語り、そして圖式化するような概念規定のもとにもたらすにすぎないものであるが、――スミスにおいては平氣で並存しているばかりでなく、交錯し、そして絕えず矛盾している。」（註四〇）

（註二二）リスト（Gide et Rist; Histoire des doctrines économiques. 1947. p. 160, 163.）カウラ（R. Kaulla; Die geschichtliche Entwicklung der modernen economic Thought. 1945. p. 160, 163.）、ローブクネヒト（W. Liebknecht; Zur Geschichte der Werttheorien in England Werttheorien. 1906. S. 138.）、リーゼンベルグ（『經濟學史概要』、直井武夫、廣島定吉兩氏共譯、第一卷、三一六、三二二、三二四、四四七頁）、1902. S.21.）、舞出長五郎氏（『經濟學史』、上卷、一四三―四頁）、波多野鼎氏（『正統學派の價値學說』、九―一〇頁）、久留間鮫造氏（『經濟學史』、一三五頁以下）、森戸辰男、笠信太郎兩氏（共著『剩餘價値學說略史』、八〇頁以下）は、このような段階說的解釋に立脚している。

（註二三）Kritik. S. 216. 譯、二七―二頁。

（註二四）Wealth. Vol. I. p. 30. 譯、第一分冊、六四頁。

（註二五）高島善哉氏著『アダム・スミスの市民社會體系』、一四五―六頁。

（註二六）Kapital. Bd. I. S. 365. 譯、第三分冊、五八一頁。

（註二七）Wealth. Vol. I. p. 68. 譯、第一分冊、一三三頁。

（註二八）內田義彥氏著『經濟學の生誕』、二六一頁。藤塚知義氏著『アダム・スミス革命』、五三頁。

（註二九）スミスの『國富論』以前における視點は、はるかにより一層小商品生產者的視點にちかいと云える。そのことは商品の「自然價格」イークオル「勞働の自然價格」とみなす規定のうちにみられよう。曰く「ある人の得たものが、勞働する間彼を維持し、敎育費を支拂うに足り、充分長生きしないかもしれずまた事業に成功しないかもしれない危險を償うに足りるときは、彼は自己の勞働の自然價格を得たのである。もし人がこれを得るならば、その場合は勞働者に對する充分な奬勵があるのであり、商品は需要に應じて生產されるであろう。」（A. Smith; Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms. edited by E. Cannan. 1896. p. 176. 高島善哉、水田洋兩氏共譯、三四三頁。）又曰く「勞働者を、ある種類の產業に專心させるのに必要な價格は、第一に、彼の生活を維持し、第二に、その特定の仕事にたいする彼の敎育費を補償し、第三に、この補償をうけとるだけ彼が永生きしない危險、および、それだけ永生きしたとしても、その職業で成功しない危險をつぐなうという、以上のことにかんして十分なものでなければならない。」（A. Smith; An early Draft of Part of the Wealth of Nations. W. R. Scott; Adam Smith as Student and Professor. 1937. 所收 P. 345. 水田洋氏譯、一〇二頁。）（ここにはなんら價値論の存しないことに注意すべきである。）またかくの如き自然價格論に立脚する次のような高賃銀論もまた彼のかかる視點を示すに充分である。曰く「從屬ほど人間を腐敗せしめるものはなく、しかしこれに反して、獨立は人々の正直をさらに增進するのである。商工業の樹立はこの獨立をもたらすものであつて、犯罪を防止する最善の治政である。そうすることによつて、一般民衆は他のいかなる場合よりもよい賃銀を得、その結果として一般的に誠實な態度が全國に行きわたる。」（Lectures. pp. 155-6. 譯、三一五頁。）又曰く「富裕で商業的な社會においては、勞働は高價となり製品は安價となる。……勞働の高價格は、單に、社會が、その使用するすべての人に充分な給料を拂いうるという、社會の一般的富裕の證據だと、かんがえられるべきで

はない。それは社會の富裕にたいする代價を構成するもの、あるいは、社會の富裕が本來そこに存するところのそのものと、みなされるべきである。……國の富裕とは國民全體の富裕であつて、それは、勞働の報酬が大きいことにより、また、したがつて獲得の便宜が大きいことにより、生ぜしめうるものに他ならない。」(Draft. p. 332. 譯、六三頁。) ここにはまた、彼における富裕の觀點がうかがえる。拙稿「『生産的勞働』について」本誌、昭和二七年五月號、四四頁（註二六）をみよ。

（註三〇）　この點、「人間の原始狀態 (Urzustand) が先驗的仕方で組立てられている。」(R. Kaulla; Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien. 1906. SS. 133-4.) とか、「ともかく、アダム・スミスは、現在の價値問題を國民經濟の理想的原始狀態とは別個に取扱つている。」(ib. S. 140.) とかのべるカウラは、あやまつている。（傍點A）

（註三一）　なお次の一句をみよ。「他の諸國〔植民地以外の諸國—A〕においては、地代と利潤とが賃銀を蠶食してしまい (eat up)、二つの優越な階級の人々が劣等な階級の人々を壓迫する。」(Wealth. Vol. II. p. 67. 譯、第三分冊、二五七頁。)

（註三二）　チュルジョンはスミス價値論の一貫性の根據をこの點にみとめている。曰く「スミスは人間勞働をはじめ價値の尺度とし、のち彼はそれを價値の源泉とみるかたむきがある。……しかしスミスはこの說明が彼自身になされるにちがいない反對論を解消させるだけの力がないということをみとめるのに躊躇しない。……彼は變化〔土地の私有と資本の蓄積との出現によるところの變化—A〕をひじように巧妙に目立たないようにした、すなわち地主と資本家との貢獻を大いに過少評價することによつて、自己の論題に外觀上の統一を保持させた。スミスは價値の生産における利潤及び地代の分前はこれをみとめざるをえなかつたが、彼はそれを賃銀の先取であり、それだけ賃銀を減少させるものとしてのべている。彼は生産の二つの派生的能因〔土地と資本——A〕に寄生的役割をあてがい、勞働に本源的重要性と卓越した職能とをとつておく。かくして、價値をして生産費をもととさせてさえ、勞働、原始時代のこの働き手は、今日でもなお、價値の主要因としてとどまる。この巧妙な遁辭によつて、スミスの說明は外觀上基本的統一をもつている。」(C. Turgeon et C-H Turgeon; La Valeur d'après les Economistes anglais et français. 1921. pp. 348-9.)

（註三三）　K. Marx; Lohnarbeit und Kapital. 1891. SS. 13-4, 26-7. 宮川實、高山洋吉兩氏共譯『マルクス・エンゲルス選集』第二卷上、二三三—四頁、二五二頁。

（註三四）　內田義彥氏著『經濟學の生誕』、二七二頁。

（註三五）　スターリン著『ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題』、二一頁。

（註三六）　高島善哉氏著『經濟社會學者としてのスミスとリスト』、一一五—六頁。岸本誠二郎氏著『勞働價値說の研究』、五五—七頁、六七—九頁。

（註三七）　高島善哉氏著『アダム・スミスの市民社會體系』、二二五—九頁、『國富論講義』第一分冊、四九—五〇頁、第三分冊、一〇頁、『經濟社會學者としてのスミスとリスト』、二三八頁。

（註三八）　高島氏編『國富論講義』第三分冊、三—一九頁。內田氏著『經濟學の生誕』、一四〇—四頁。

（註三九）　スミスの價値論に「哲學的」(philosophisch) 及び「經驗的」(empirisch) の二要素を見出すヴィーザーの見解 (F. v. Wieser; Der natürliche Werth. 1889. Vorwort. SS. III—VI.) は、スミスの論理における上向法の缺除の一面的把握たるにすぎない。すなわち——ヴィーザーによれば——價値法則は「哲學的」理論であり、自然價格論は「經驗的」理論である。しかもこの二つの理論は混亂している。彼の見解によれば、「哲學的」理論はあやまりであつて、「經驗的」理論がただしいのである。彼の立場は經驗主義である。曰く「リカードオの書物の刊行されてから今や半世紀餘、スミス以後全一世紀以上經過した。じらい社會科學にたいする要望は强力にたかまつた。スミスの時代には、人は生成せる狀態を『根源的』(ウルスプリュングリッヒ) 人間本性及び事物の『根源的』(ウルスプリュングリッヒ) 狀態からあきらかにし、且つそれで滿足した。我々は現實を現實から說明しようと欲する。哲學それ自體が經驗的になつた。信憑すべき狀態の經驗からひきだされない證據を哲學はなんら許容しない。」(ibid. S. VI.) ヴィーザーの考え方は、その後における價値論無用說——「經驗科學」主義の立場にたつところの——への道をひらいたものであると云えよう。

ホィッテイカーによれば、ヴィーザーの見解は、スミス及びリカードオの理論に關する眞實の解釋たるのみならず、イギリスにおける價値論の發展の理解に資する最大にして唯一の貢獻であるという。(A. C. Whitaker; History and Criticism of

the Labour Theory of Value. 1904. p. 12.)すなわち、勞働價値說は――彼によれば――價値規制の理論(theory of value regulation) 及び價値測定の理論 (theory of value measurement) をふくんでいる。そして前者には二つの別個の說明――ヴィーザーのいわゆる「哲學的」及び「經驗的」說明が區別されることなしに混亂したかたちでふくまれている。これがために、またその理解の困難がうまれてくる。「『哲學的』說明は近代の經濟學の父たちが價値の一般的謎、その窮局の性質すなわち本質(エッセンス)の謎にあたえた解答である。――この哲學の彫琢と例證とは、つねに原始的及び『自然的』社會に到達する。ここでは地代の必要もない平等な獵師や漁夫が彼等の勞働の生產物を日數で測定して交換する。けれども、注意が現實の世界の財貨の市場價格に向けられるとき、商品の交換價値が、その生產物を獲得するのに支拂われねばならぬ勞働の賃銀、資本の『利潤』及び土地の地代に合致する傾向があるということは、事物の本質についての思索と對照的な事務上の經驗の事柄としてみなされる。これが『經驗的』說明である。この發見された原理は、企業家費用の法則としてしられている。」(ib. pp. 13-4.)「『哲學的』說明における中心的思想は、投下勞働が價値の本質(エッセンス)であるということである。それははじめ確認のために讀者の內省的判斷に訴える。それによつて『哲學的』說明が例證される原始の社會狀態は全く想像的なものである。『經驗的』說明は外面的に觀察された市場の競爭の傾向である。」(ib. p. 14.) しかし、この種の解釋のあやまりは、本文にのべたところよりして推論されるであろう。そのいわゆる「哲學的」理論はスミスにおける本質洞察的方法、「經驗的」理論は現象記述的方法を示すものにほかならぬ。さればこの兩者が經濟學の方法における上向法のうちに統一されなければならぬのに、その不統一、混亂を呈していることこそ批判されるべきであつて、一を去り他をとるのは、スミス以上のあやまりをおかすものと云わねばならない。

ちなみに、スミスの「原始的社會」を以て「社會科學における實驗裝置」とみなす宇野弘藏氏の見解（「社會科學の客觀性」「社會科學研究」第一號）や、「スミスは正當にも、資本家的生產が商品生產の發達の結果であることを知つており、資本家的生產關係の分析が單純な商品生產關係の分析から出發すべきことを知つていた。かくして彼は、さきに引用した『國富論』の第五章においては、主として、この單純な商品生產の關係を考察しているのである。」（『經濟學史』一二五―六頁）とのべ、第五章に賃勞働の關係がもちこまれているのは單なる概念の混亂によるものとされる久留間鮫造氏の見解（同、一二六―七頁）には、ともに疑義の存するところである。

（註四〇） Theorien. Bd.II. Th. 1. SS. 2-3. 譯、一二―三頁。なおV＋Mドグマに關聯して、Kapital. Bd. II. S. 380. 譯、第七分册、四九二―三頁。價値構成說に關聯して、ib. SS. 391-2. 譯、同、五〇七―八頁參照。

## 四

スミスが價値法則の適應性を「初期未開の社會狀態」に制限した理由について、我々はいままで超越的に、すなわちスミスのおかれた時代及び彼の方法に關聯して說明してきたが、なおここに內在的に、すなわちスミスの經濟理論にそくして檢討したいと思う。

この點において注目されるのは、スミスによつて剩餘價値論が確立されなかつたということ、詳言すれば、價値法則を基礎にして利潤、地代等の不勞所得の發生が充分成功的に說明されなかつたということである（註四一）。もちろん彼はかなりこの問題を積極的に解明してはいる。すでに第一節において揭げた文章においてみられる如く、スミスは利潤及び地代を勞働者の勞働の成果である生產物からの控除としてみなしているのである。しかしそこに引用した文章においては、なお素材的視點に立脚していることをまぬかれない。だが次の文章（同じく第一篇第六章）においては、價値生產物の分割の問題としてとりあげられている。

「資本(ストック)が一度び特殊の人々の手に蓄積されるや否や、彼等のあるものはその資本を用いて、勤勉なる人々に原料と生活資料とを供給して仕事をなさしめ、彼等の製作物の賣却によつて、または、その人々の勞働が原料の價値に添加するものによつて、利潤を得ようとするのは自然であろう。そしてその完成した製造品を、貨幣、勞働または他の貨

物と交換する場合には、この冒險に敢て資本を投ずるこの事業家のその利潤として、原料の價格及び職工の賃銀を支拂うにたるもの以上に、何物かが與えられなければならない。それ故に、この職工たちが原料に添加するところの價値は、この場合には二つの部分に分解する、すなわち、一部分は彼等の賃銀を支拂う、そして他の部分は雇主が前貸したところの原料と賃銀との全資本にたいする利潤を支拂う。もしも彼等の製作物の賣却が資本を回收するだけにとどまり、それによつて雇主自ら得るところがないならば、彼はこれらの人々を傭うべく何の興味ももたない筈である、そしてまた、もしも彼の利潤が彼の資本の大きさに對して一種の比例を保たないならば、小資本よりも大資本を用いることについて彼は何の興味ももたない筈である。」（註四二）。

右の文章中には後述の如き剰餘價値論と對立する見解も含められているが、ともかく價値分解說が明示されている（註四三）。更に第一篇第八章中には次の如くのべられている。

「殆どすべての他の勞働の生産物もまた、右「農業生産物――A」と同樣の利潤の控除を受けるのを免れない。あらゆる工藝と製造業とにおいては、職工の大部分は、彼等の仕事の原料と、その仕事が完成するまでの賃銀と生活維持手段とを前貸してくれる雇主を必要とする。彼は彼等の勞働の生産物、言い換えれば、その原料を用いて勞働が行われた結果、その原料に附加された價値の分前に與かる、そしてこの分前こそ彼の利潤である。」（註四四）

第二篇第三章に曰く「製造工の勞働は一般に、彼が工作する材料の價値に、彼自身の生活維持手段と彼の主人の利潤との價値を附け加える。……製造工はその賃銀を彼の主人から前貸して貰つているのであるけれども、それらの賃銀の價値は一般に、彼が勞働を加えた對象の增大した價値の内に、一定の利潤を伴つて回收せられるのであるから、實際上は、主人には一文の費用もかからないのである。」（註四五）

また、地代について、一章句を引用すれば、第二篇第五章に曰く「農業に使用せられる勞働者及び役畜は、製造業の勞働者の如く彼等自身が消費したものに等しい價値、あるいは、彼等を雇傭する資本に等しい價値をその所有者にたいする利潤とともに、再生産するのみならず、それよりは遙かにより大きい價値を再生産するのである。すなわちこれらのものは、農業者の資本及びそのすべての利潤以上に、なお地主の地代を規則正しく再生産する。」（註四六）

これらの章句（及び第一節引用の章句）によつて我々はスミスが「資本のもとへの勞働の形式的包攝」（『資本論』第一卷第五篇第一四章）を指示していると云いうるであろう。かくして事實上、スミスは「資本（ストック）の蓄積と土地の私有」ということによつて、いわゆる「本源的蓄積」をいみし、「市民社會」「文明社會」の語によつて資本主義社會をいみすることとなる。けれどもスミスには剰餘價値の論理そのものがない。彼には一定量の價値である貨幣がいかにして生産過程において自己を增殖して資本に轉化するかがあきらかでないのである。彼にとつて剰餘價値の生産は――マルサスにおけるほどでないにしても――むしろ流通過程の觀點から把握され、いわば勞働と資本との不等價交換としてとらえられる。元來、生産過程に先行して流通過程において資本と交換されるものは、勞働ではなくして勞働力である。しかも兩者は價値法則にもとずいて交換される。しかも生産過程において勞働者が必要勞働時間以上に働くことによつて、いわば勞働力の使用價値と價値との乖離によつて、剰餘價値が生産される。スミスが前引の文章において勞働者が原料（＝不變資本）に附加する價値は、賃銀（＝可變資本）と利潤及び地代（＝剰餘價値）に分割されるとのべるとき、このことの成果を表白しているのであるが、しかし彼には、資本の流通過程（G―W, W―G）が媒介される生産過程（W…P…W）の論理が缺如している。（もつとも彼には他面、勞働の生産力の增進―「資本のもとへの勞働の實在的包攝」（『資本論』第一卷第五篇第一四章）による相對的剰餘價値の生産をみとめているらしい個所もあるが。）かくして、スミスには貨幣

の資本への轉化が勞働と資本との不等價交換によるものと映じ、すなわち資本家は購買した勞働の對價を價値通りに支拂わず、その差額が剰餘價値となるかの如くに考えられる。かくして資本價値の增殖率はそれによつて支配しうるあるいは購買しうる勞働量によつて測定されるとみなされる。換言すれば、資本としての商品の評價は、それが支配しうる、あるいは購買しうる勞働量に依存するとみなされる。

ここにスミスの支配勞働價値說の眞意が見出される。それは支配勞働價値說の積極面である。しかし、スミスの概念の混亂のゆえに、それは一轉して消極面を露呈せざるをえない。商品流通と資本流通との混同及び生きた勞働と對象化された勞働との混同がこの場合、致命的である。すなわち資本としての商品の評價が商品としての商品にまで擴充され、生きた勞働による評價が對象化された勞働による評價にまで擴充され、かくして一般に商品價値の尺度は投下勞働量ではなくして支配勞働量であると宣言される。これが原理となる。投下勞働量は支配勞働量と合致するかぎりでのみ價値の尺度たりうる。但しそれは資本（ストック）の蓄積と土地の私有とのおこなわれている市民社會にはみとめがたい。それゆえ、投下勞働量による尺度は、初期未開の社會に放逐されざるをえないであろう。この間の事情を詳言すれば次の如くである。

勞働と資本との不等價交換ということ――すなわち支配あるいは購買される生きた勞働が資本（としての貨幣または商品）に投下された勞働を超過するということ――が一般の商品流通にまで擴充されるとなれば、當然商品はそれに投下されている勞働量以上の勞働量、しかも對象化された勞働量を支配するということによる。とすれば、一般に商品流通にさいして、投下勞働量は支配勞働量と合致しないのを通則とする。しかもスミスにおいては勞働と賃銀との混同視がある。（これは簡單に云えば勞働と勞働の價値との混同視ということである。更につきつめれば、スミスは勞働の生産物イークオル勞働の自然的報酬（「賃銀」という範式を市民社會、實は資本主義社會へもちこんでいるように考えられる。しかも一方、勞働と勞働生産物（「＝對象化された勞働」）とが混同視されているとすれば、當然ここに勞働＝勞働生産物＝賃銀ということになるのではなかろうか？）そこで商品に含められている勞働（かかる勞働によつて形成される價値）は賃銀のみを回收するにとどまり、利潤及び地代部分はどうしても他からその源泉（價値源泉）を見出さざるをえない。しかも、もし支配勞働量が投下勞働量を超過しているとすれば、そして支配勞働量によつて商品價値が尺度され、規定されるということであれば（スミスには價値の實體概念がないので尺度と規定とは同一視されている）、この支配勞働量の投下勞働量にたいする超過量こそ、まさに利潤及び地代の源泉（價値源泉）であるとみなされる。ここにみられるものは、スミスが批判した重商主義の讓渡利潤說、販賣にもとずく利潤の發生の說明にほかならない（註四七）。この點、マルサスと共通であつて、稚拙な表現ではあるが、ともかく剰餘價値の起源を說明したスミスも、多くの概念の混亂によつて、惡戰苦鬪、刀折れ矢つきて、はじめよく、おわりわるし、の結果をまぬかれない（註四八）。

かくしてスミスはいう。「その交換價値が勞働（賃銀とすべきだ。――A）のみより成る商品の數は、文明國においては非常に少なく、大部分の商品の價値のなかには地代及び利潤が貢獻するところが多いのであるから、その國の年々の勞働の生産物は、その產出、精製及び市場への搬出に使用した勞働よりははるかに多量の勞働を購いまたは支配するに足るものに相異ない。」（註四九）。なお第一節に引用したスミスの二つの文章（三八頁八行目以下及び三九頁一〇行目以下引用）をもみよ。

かくして、第一節において指摘した如く、自然價格論が支配勞働價値說とむすびついて主張されることとなり、それは投下勞働價値說＝價値法則とは全然獨立の命題となる。すなわち價値分解說にかわる價値構成說となる。價値が

賃銀、利潤及び地代に分解されるのではなくして、逆に賃銀、利潤及び地代が價値を構成するという見解、これである。いわば生産費説である(註五〇)。この場合、スミスにおける他の概念の混亂、剰餘價値と利潤と平均利潤との無差別及び「三位一體的範式」(『資本論』第三卷第七篇第四八章)が大きな役割を演じることはいうまでもない。大乘的(エゾテリッシュ)なスミスはいつしか消えうせて、小乘的(エクゾテリッシュ)なスミスが前面にあらわれてくる。剰餘價値論は讓渡利潤説に墮落し、價値法則はこれとは全然獨立の自然價格の法則によつてとつてかわられる。價値法則は、當然、資本主義社會以前へ放逐されざるをえない。それはブルジョアたちの失われた樂園においてのみ市民權をあたえられる。

しかしそれにもかかわらず、いつたん、後景へしりぞいたはずの大乘的(エゾテリッシュ)なスミスは價値法則を前提として剰餘價値の發生を説明しており、したがつてまた價値法則が資本主義社會の生理學において重要な意義を有することをみとめている。マルクスはこの點を高く評價し、多くの混亂にもかかわらず、ときとしてリカードオにたいするスミスの優越すら見出している。したがつて、そのマルクスが單純に、スミスが價値法則の資本主義社會における意義を否定したと解しえなかつたことはいうまでもなかろう。いな、マルクスによつて價値法則における歴史と論理との統一がなされたのも、スミスにおけるこのような「重要」な諸矛盾にかくれた「ただしい本能」を異常な嗅覺によつてかぎ出し、つきとめ、しかもこれを批判的に攝取しえた點にあると云えよう。

(註四一) E. Roll; A History of economic Thought. 1945. p. 165.

(註四二) Wealth. Vol. I. p. 50. 譯、第一篇、一〇一—二頁。傍點はエンゲルスが『資本論』第二卷序文中に引用せるさいの傍點。

(註四三) くわしい批判は、Theorien. Bd. I. SS. 138-42. 譯、一五一—四頁參照。

(註四四) Wealth. Vol. I. p. 67. 譯、第一分冊、一三二—三頁。傍點A。

(註四五) ib. p. 313. 譯、第二分冊、一〇五頁。傍點A。

(註四六) ib. pp. 343-4. 譯、第二分冊、一六〇頁。傍點A。

(註四七) したがつて、スミスの利潤起源論には、剰餘價値論と讓渡利潤説との二要素がみとめられる。ベームはこの點を指摘している。曰く「スミスはこれ〔企業家の資本利得の源泉——A〕についてさまざまの箇所で二つの相互に矛盾する説明をあたえている。一つの説明によれば、資本利得は、資本家の利得要求のために買手が支出された勞働を顧慮してそれにあたえられる價値以上に商品に支拂うことを同意しなければならぬことから生じる。この説明によれば、資本利子の源泉は、一つの——別に明瞭なものではないが——勞働によつて創造された價値以上への生産物の價値增加たるであろう。第二の説明によれば、利子はこれに反して、資本家が自分のために勞働の收益にたいしてなす〔控除より生じる、かくして勞働者は彼によつて創造された價値の全部を受取らず、これを資本家と分かたねばならない。この説明によれば、資本利得の源泉は、勞働によつて創造された價値の留保される部分たるであろう。」(Böhm-Bawerk; Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien. 1921. SS. 62-3.) スミスの立場は完全に中立的であると、ベームはみている。(ib. S. 65.) この解釋はリストによつては肯定されているが(Gide et Rist; Histoire des Doctrines économiques. 1947. p. 86.)、キャナン、ツッカーカンドルは異説をとなえている。キャナンは剰餘價値説一本の立場に立脚する。(イ)スミスは利潤を監督・指揮勞働の賃銀とみることを拒絶している。(E. Cannan; A History of the Theories of Production and Distribution. 1924. p. 200.) (ロ)スミスによれば、「利潤はかくして勞働の自然的報酬あるいは賃銀からの實質的控除である。」(ib. p. 201.) (ハ)なぜ、かかる控除に勞働者はあまんじるか？「アダム・スミスにとつては、利潤は勞働者が生活維持手段をもたず、生産の材料をもたぬために服しなければならぬところの勞働の生産物からの〔控除として映じたといつてよかろう。ベーム・バヴェルク博士の信じるところでは、アダム・スミスはまたしばしば利潤は勞働の生産物の價格への〕附加であるという趣旨のもう一つの理論を提出したとのことであるが、しかし彼が引用する諸章句はこのような理論の存在をほとんど證明しない。」(ib. pp. 201-2. なお p. 202. 註(2)におけるベーム批判をみよ。それは次逸のツッカーカンドルのそれにちかい。) ツッカーカンドルは同じく剰餘價値論的解釋である。(R. Zuckerkandl; Zur Ausbeutung des Arbeitslohnes. 1871. S. 1-3.) ベームはこれを「初期未開の社會狀態」について

Theorie des Preises. 1936. SS. 247-52.）彼は利潤をスミスが賃銀のおしさげによつてうまれるとみていたと解し、したがつて生産物價値の超過によつて利潤の發生は説明されていないと解するが、この場合、スミスにおける勞働＝賃銀の範式がみおとされている。

カウラは支配勞働説にスミスが立脚して、賃銀のみならず、利潤、地代もまた勞働によつて尺度されるということから、スミスは利潤について剰餘價値説的に解しているとのべている。（R. Kaulla; Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien. 1906. SS. 138-9.）しかし、支配勞働説に立脚するかぎり、直接的には、ベームの解する如く譲渡利潤説とみる方が正しい。テュルジョンはスミスにおける投下勞働説と支配勞働説との區別のいぎを理解せず、更に價値の規定と尺度、價値の内在的尺度と外在的尺度との區別のいぎを理解しないで、安易にスミスは資本主義社會についても價値法則の妥當性を信じていたとみているが、内在的な理解ではない。（C. Turgeon et C-H Turgeon; La Valeur d'après les Economistes anglais et français. 1921. pp. 62-8.）

（註四八）Theorien. Bd. I. S. 136, 140-3, 151-2. 譯、一四八―九、一五三―五、一六二頁。Bd. II. Tl. 1. S. 115, 120-2. 譯、一二四、一三〇―一頁。

（註四九）Wealth. Vol. I. p. 56. 譯、第一分册、一一三頁。その批判――Theorien. Bd. II. Tl. 1. S. 129. 譯、一二六―七頁。

（註五〇）その批判――Kapital. Bd. II. SS. 385-6, 389. 譯、第七分册、四九九―五〇〇、五〇四頁、Bd. III. SS. 908-9, 918; 923-34. 譯、第一三分册、一二〇二、一二一四―五、一二二一―三四頁。

――一九五四・二・一九・稿

資料

# 勞働者意識についての若干の問題（上）

## ―四工場の調査を素材として―

青沼吉松

本論文は四工場卽ち川崎市のI自動車、東京都内のY毛織、M市のN工具、K戸車の諸工場を對象としてなした調査を素材としている。（1）これらの工場は各種の面で相違點をもつており、かつ工場内部においても職員―工員、勞組幹部―平勞組員等の相違がある。これらを比較しながら、勞働者意識の若干の問題をとりあげようとするのが、本論文の意圖である。勞働者意識のいがなる面を、どのような形で問題にしようとしているか、この研究がいかなる見透し或は假説をもつて着手されたかについては後述に委ねる。なお、この調査は質問紙法を軸として、面接法によつてそれを補强するという形でなされた。（2）

（1）I自動車とY毛織との調査は、昭和二七年度「日本における社會緊張の研究」産業勞働班（班長尾高邦雄教授）の一部として昭和二八年三月に實施された。これらの調査は三枝幹夫（勞働科學研究所）、北川隆吉（東京大學）兩氏及び筆者の協同によつてなされた。質問紙の配付、蒐集等については三枝、北川兩氏はY毛織を、筆者はI自動車を分擔した。この協同研究の成果の概要は報告されたが、本論文はこの報告を單に敷衍したものではなく、筆者の見解を强く出し、多少とも獨自な立場から作成した。從つて分析未熟の責は筆者のみが負わねばならない。かかる形での資料の利用を許諾された協同研究者に謝する。なお、I自動車の調査には本塾大學院學生竹内恒宣、丹下利邦兩君の協力をえた。

新潟縣M市のN工具とK戸車の調査は、昭和二八年文部省科學研究助成補助金をえてなされた「三條市の社會的研究」の一部として實施された。これらの調査は本塾大學院學生小林康志君の協力をえて、昭和二八年九月に行われた。

（2）Iの從業員約四千のうち三三三を、Yのそれ約一千四百のうち三二六を、Nのそれ約六〇のうち四五を、Kのそれ約百のうち四七を抽出し、それらについて質問紙調査を行つた。標本の抽出法はランダムであり、回收率はIでは八割、その他では九割程度であつた。なお本調査に入る前に、Iで約百名を抽出して、豫備調査をなした。

面接は質問項目の檢討、量的に表現されたものをいかに解釋するか等に重點を置いてなされた。面接者の數は各工場で異るが、數名乃至二〇名程度である。

## 一　勞働者についての社會心理的問題は、彼らが置かれている社